

Does the Size Matter? (規模は問題か)

-レイクキャビックで考える-

開倫塾

塾長 林 明夫

Q : レイクキャビックには、何をするために行ったのですか。

A : (林明夫 : 以下省略)6月5日~7日に、アイスランド大学で開催された OECD IMHE(経済協力開発機構、高等教育管理)プログラム主催の「Does the Size Matter? (規模は問題となるか)」というテーマの、大学の国際競争に関する国際会議に参加のためです。公用語は、OECD 主催ですので英語とフランス語。参加者は約 100 名で、日本からの参加は私を含めて 4 名、私以外は大学財務センターの先生方のようなのでした。

私は、OECD IMHE プログラムのメンバーですので、一人のメンバーとして参加させて頂きました。OECD から e-mail で案内があり、インターネットを通じて参加申し込みをしました。

Q : OECDの会議には、誰でも参加できるのですか。

A : はい。各プログラムのメンバー以外でも、OECD の多くのプログラムは参加可能です(クローズドも半分以上はありますが…)。OECD の東京センターやパリ本部の行事予定欄を見て、参加できるものには皆さんもどんどん参加されることをお勧めします。日本の OECD への拠出金は、米国に続き世界 2 位です。世界最先端の政策論議が多く分野で展開されているのが OECD なのに、日本の活用度が著しく低いのは、「もったいない」と痛感しています。

「フィンランドが今日ようになったのは、OECD のフル活用のためである」と、在日フィンランド大使から、また、前 OECD 事務総長から、私は直接質問してお聞きしました。

Q : アイスランドはどんな国ですか。

A : 日本の国土の四分の一くらいの面積に、たった 32 万人の国民しか住んでいないコンパクトな国です。緯度は高いのですが、地勢と暖流のために気温は冬でもマイナス 3 ° くらい、夏は 15 ~ 16 ° くらいでちょっと涼し目ですが、過ごしやすい国です。乳児死亡率の低さと平均寿命の長さは、ともに世界トップクラス。一人当たりの国民所得は年間 6 万ドルで、日本の約 1.5 倍と非常に豊かな国です。人口当たりの書店の数は世界一です。

レイクキャビックの街並みは、東京ディズニーランドよりも美しいと思います。ゴミ一つ無い清潔な都市です。自然も豊かです。私は行きませんでした。温泉もいたるところにあるようです。

Q : Does the Size Matter? (規模は問題か)とは、面白いテーマですね。

A : 会議には、文部大臣やアイスランド大学の学長も参加。国は小さいが、また、大学の規模は小さいが、アイスランド国立大学を世界一競争力のある大学にする。学部の整備が終わったので、これからは修士課程、引き続き博士課程を整備し、国民の大半を博士課程まで修了させてみせると語っていました。

ちなみに、アイスランドは、フィンランドはじめ他の北欧の国々と同じように、教育費は保育園

から大学院まですべて無料。ただし、消費税は、24.7%。物価は、消費税込みで日本の1.5倍くらいの感覚でした。

Q：大学は、サイズつまり規模で何が問題だというのですか。

A：国際競争力こそが問題、これが結論です。では、大学の国際競争力とは何か。大学を支える人材、学生、資金の3つをマグネットのように引き付けるのは、「大学の独自能力」と私は考えます。大学であっても、教育機関の質は、①カリキュラムの質、②教師の質、③マネジメントの質と、3つの質で決定されます。つまり、①現代及び未来の地球への問題解決に対応した研究テーマの設定。②世界で一流の研究者、教育者を招聘すること。③そのためのマネジメント体制を整備。このために、「選択と集中」をしてムダを排し、資金調達を成し遂げること。

Q：大学も大変な競争ですね。

A：どの国も、人口減少社会に突入しますから、「大学の大量化」がどんどん進みます。大学の生き残り策として、学力の低い高校卒業生に対する「補習教育（リメディアル教育）」、「初年次教育」、「キャリア教育」の徹底が求められます。同時に、質の高い「外国人留学生の受け入れ」、及び「一度社会に出た人々の再教育」「リタイアした人々への教育」、更には、「すべての年代の人々への大学開放」が求められます。このように、あらゆる可能性を考えた上で「独自能力」を発揮せねば、大学であろうと、ゆでガエルの状況を経て「閉鎖、倒産」となってしまいます。

ただし、現代社会は「知識基盤社会」ですので、どんな国も、地域も、もっと言えば企業や組織も、大学との強力な連携なしでは存在できません。大学は、現代において最大の社会的使命（ミッション）と可能性を秘めた存在と言えます。

日本で足りないのは、大学経営者をはじめ大学で生活するすべての人々の、このことに関する「自覚」です。

Q：学習塾、予備校、私立学校の経営者の皆様にお伝えしたいことは何ですか。

A：「教育に規模は関係ない。大事なものは、国際競争力を生み出す独自能力だ」というこの会議の成果は、皆様と十分共有できると考えます。

結果としての「合格実績」は大切ではあるにしても、「単に上級学校に合格させればよい」という考えでは、プロセス無視の教育に陥ります。学習塾や予備校、私立学校の経営者「独自の」観点から「競争力」を生み出すことが、子どもの人生の成功、日本の持続的発展、とりわけ国際競争力ある日本をつくるために求められます。

Q：最後に一言どうぞ。

A：百聞は一見に如かず。皆様も是非一度、アイスランドを御訪問下さい。人口32万人とコンパクトではありますが、驚くほど豊かで美しい国、勉強熱心な国がそこにはあります。英語は誰でも話し、よく通じます。

今月も、素晴らしい本を一冊御紹介させていただきます。大園恵美、清水紀彦、竹内弘高 著「トヨタの知識創造経営－矛盾と衝突の経営モデル－」日本経済新聞社 2007年6月12日刊。一ページ、一ページ、一行、一行が心にしみるほどよい本です。是非、御一読を。

－ 2008年7月17日記－